

❖ 講演会・研究セミナー ❖

古典籍資料総合研究班 古典籍資料研究プロジェクト  
「歌合の本質とその集積についての研究」

源俊頼の歌合評語—六条藤家への影響をめぐって—

『四生の歌合』の構造

2023 年 2 月 26 日(日)14:00～17:00

オンライン開催 (Zoom)



---

❖ 概 要 ❖

---

2023 年 2 月 26 日（日）、古典籍資料総合研究班主催の古典籍資料研究プロジェクト「歌合の本質とその集積についての研究」の一環として、溝端悠朗氏（高野山大学専任講師）と大山和哉氏（同志社大学助教）を講師に招き研究集会が開催された。溝端氏は「源俊頼の歌合評語一六条藤家への影響をめぐって」、大山氏は「『四生の歌合』の構造」と題して研究報告を行った。安井重雄氏（龍谷大学文学部教授）の司会の下、両氏の報告に続き、参加者全員での討論が行われた。

---

講 演 者： 溝端 悠朗 氏（高野山大学 専任講師）

---

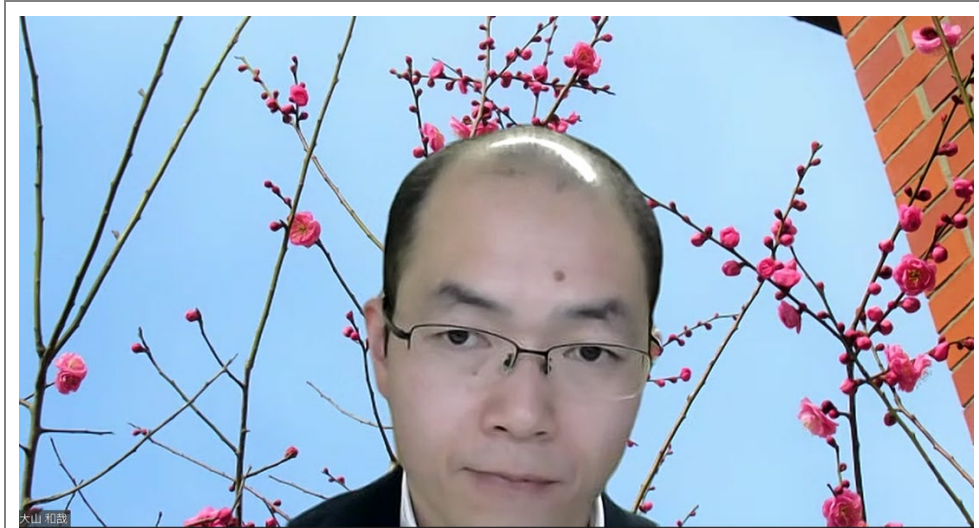


溝端 氏

溝端氏は、まず源俊頼（1055～1129）が判者を務めた歌合（衆議判の執筆の場合も含む）を一覧表に示したあと、俊頼が関与した歌合の詠歌が六条藤家（清輔）周辺への影響例を提示した。ついで、俊頼が初めて用いた、または特徴的に用例数の多い歌合評語を収集し、とりわけ「おびただし」「てづつ」「よみます」を取り上げて、それらの享受や展開を分析した。その結果、俊頼が創出した歌合評語は、清輔を中心とした六条当家の判者へ引き継がれていたが、その後全く用例がなく、消えていったという場合も多い。最後に未解決の

課題を述べて報告を締めくくった。

講演者：大山 和哉 氏（同志社大学 助教）



大山 氏

大山氏は、従来すべて木下長嘯子著かとされてきた江戸時代前期成立の異類物歌合『四生の歌合』を取り上げ、先行研究を振り返り、作品の成立・内容に関する問題について考察を加えた。原形本『虫歌合』と古活字本『四生の歌合』における本文・刊記等を比較した結果、『四生の歌合』作者は現状、不明とせざるを得ないとする。また従来『四生の歌合』本文内容に対する検討の足りなさに鑑み、大山氏は、その内容に注目し、主にどのような典拠によって本文が作成されたかを考究することを通して、当該作品の成立背景、特徴をあぶり出そうと試みた。